

新春
座談会

都市基盤大改造に期待される 推進工法(4)

推進工法関連企業編



昨年9月に開催されたIOC総会で、2020年夏季オリンピック・パラリンピック開催地が東京に決定された。東京での開催は、1964（昭和39）年に次ぎ2回目となる。メイン会場となる千駄ヶ谷の国立競技場では大改築をはじめ、東京湾臨海部での各種競技場や選手村の建設により、東京は次世代に向け大変身する。

一方、これらの都市機能を支える地

下基盤施設はどうか。例えば、東京区部の下水道管路の多くは先のオリンピック開催に向け突貫的に築造されたもので、供用以降、優に50年は経過し、その老朽化懸念される。下水道に限らず、水道、電力、都市ガス、通信など全ての地下インフラについても同様だ。これらに的確に対処することが、2020年オリンピック・パラリンピック開催を迎える世界都市東京にとって、緊急かつ

重大な課題となる。

その際、我が国推進業界が、ここまで積み重ねた努力と創意工夫で培った世界最高水準の推進技術、例えば長距離・曲線推進、改築推進、超大口径管推進さらには大規模パイプルーフ工など、推進工法採用の期待が高まるが、その実力を遺憾なく発揮するためには、高品質な推進管材の確保はもとより、滑材、添加材およびその注入技術の向上、さらには管内自動測量技術の更なる高度化が伴わなければならない。

これらの展望を、推進工法関連企業の30代半ば若手技術者に熱く語って頂く。彼らこそ、2020年時点では、推進施工現場における技術支援パートナーとしての活躍が期待される。

出席者（敬称略）

大戸敦史	中川ヒューム管工業(株)技術営業部技術課主査
前田達宏	日本ゼニスパイプ(株)工事部
西田和也	(株)ソーキ技術本部技術サービス部東京グループ
小崎保弘	(株)立花マテリアル大阪支店営業部第2課主任
[進行役] 石川和秀	(公社)日本推進技術協会専務理事（本誌編集委員長）

推進施工現場の 技術支援パートナーの活躍に期待

いしかわ かすひで
石川 和秀
(公社)日本推進技術協会
専務理事



石川：皆さん、明けましておめでとうございます。2020年7月、東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定されています。それまでの準備期間は、わずか6年半です。年が開け、今年2014年は、それらに関連する種々の整備事業が動き出す時期となります。それには下水道など高度な都市機能を支える地下基盤の大改築、拡充あるいは新設が予定されます。そこに、我が国の世界最高水準の推進技術の活用が見えてきます。

本日は、それら高度な推進技術を現場サイドで支える関連技術企業の若手技術者にお集まり頂き、それに向けた期待や要望、さらには自らが携わる推進関連技術の今後のあり方など、力強く語って頂こうと思います。それでは、自己紹介も兼ねて、今の会社へ入社した動機と、これまでの推進工法との業務上の付き合い、それを通じ得た印象などをお聞かせ下さい。

大戸：中川ヒューム管工業(株)の大戸敦史です。現在技術営業部に在籍しております。入社した動機は、コンクリート工学が学生時代の専攻でもありそれを生かした物づくりに携わりたいと考えていたからです。推進工法とは主に管材の設計開発、製造として関わってきました。管材に対する主な要求事項は、施工性・強度・耐水圧そして耐震性能となりますが、推進工法用ではさらに軸方向耐荷力が加わります。これらを同

時に満足する管材を提供するのが我々の仕事であり、推進工法は常に課題を与えてくれるパートナーであると感じています。

前田：日本ゼニスパイプ(株)の前田達宏です。現在工事に在籍しております。私は大学卒業後建設コンサルタント会社に入社したのですが、土木構造物の設計を続けるうち、机上の理論だけでなく、実際の施工現場や使用材料など生の土木のモノづくりというものを知りたいという欲求が大きくなり転職致しました。

弊社は推進管をはじめ、マンホールやボックスカルバート等の水路施設だけでなく、道路製品さらには防災製品など多岐にわたる製品および工事を取り扱っており、建設構造物に生で触れたい・学びたいという欲求を大いに満足させてくれる会社でした。また、グループ会社製品の取り扱いを含めると、今後さらに多くのモノづくりに触れることができると期待しております。

推進工法との業務上の付き合いですが、私は工事に在籍しておりますが、現在推進工事自体を弊社にて行うことはなく特殊管材の提案や、少しありがたない話なのですがトラブル対応などに関わっています。語弊があるといけないので付け加えると、現場にて不都合が発生すると、メーカーの責任にされることが多いのですが、ほとんどが管に原因があると特定できないものなので

す。ただ、現場の無事竣工のために一致団結していこうというのが日本のメーカーの大体一致した対応だと思います。

推進工事の印象ですが、最近では手ごろな距離でまっすぐな推進工事などほとんどなくなってしまったような気がします。1kmを超すような長距離や急曲線など、どんどん難工事化していている印象です。このような難しい工事を成功させるには、施工、機械、管材料、測量、滑材どれか一つの不具合・不調も許されないと感じました。全ての要素がしっかりしていないと失敗の可能性は格段に大きく、また取り返しがつかないことが多いため、他の工種と比べても各業者の責任は大きく、綿密なチェックと打合せが必要であるという印象です。

西田：(株)ソーキの西田和也です。「地図に残る仕事がしたい」という思いから学校を卒業後、測量会社に入社しました。測量会社時代に知り合った方がソーキに転職し、その方の誘いで今の会社に入社しました。今の業務は、技術サービス部という部署で主に弊社の開発した推進自動測量システムを運用し、推進の施工に携わっています。弊社の開発した推進自動測量システムは、私の入社以前から現場様の協力もあり日々改良され現在に至ります。今でも古くから弊社の推進自動測量システムに携わっていただいている現場様や弊社の先輩からは昔はどれだけ大変だったかを聞かされ、その時の苦労が今の進